



障害のある人の人権

～コロナ禍で見えてきたこと～

2020年は新型コロナウイルスの感染拡大で、わたしたちの生活にとっても大きな影響と変化がありました。「新しい生活様式」が提唱され、マスクの着用、手洗いや消毒、ソーシャルディスタンスなどが求められるようになりました。



これまではなかった難しさ



その中で、他者の行動を監視し、過剰に干渉する人が出てきました。しかし、人にはそれぞれ外見からはわからないさまざまな事情があります。

たとえば、感覚や皮膚の過敏症、呼吸器疾患があるため、マスクをつけられない人もいます。マスクをつけた顔に怖さを感じてしまう人もいます。「密を避けよう」と言われても、支援のために距離をとれない（もしくは、体を寄せざるを得ない）場合もあります。



さまざまな事情



どちらの場合も、そうせざるを得ない **その人なりの事情** があります



みんなで考えてみよう



コロナ禍の中で、まだわからないことだらけのウイルスへの恐怖や、ゆがんだ正義感が偏見・差別につながり、社会問題となっています。心理的な恐怖や偏見が、さまざまな差別・迫害へとつながってきたという例は、これまでの歴史の中でも数多く見られます。

よく知らないことに対しては、誰も不安を感じます。

正しく知って、やみくもに恐れないこと。そして、一人ひとりの事情を思いやることが、みんなを大切にする社会、自分自身も大切にされる社会につながります。

いろいろな立場の人がいるという、相手を思う想像力が大切です。想像することで、相手を傷つけたり差別することを避けることができ、どう行動したらよいか見えてきます。